報　告

「隣る人」上映およびパネルディスカッション
－あなたは誰かにとって「隣る人」になれますか？－

○福田みのり*1　梅木幹司*1　西本佳代*1

キーワード：隣る人、児童養護施設、絆、家族、学生ゲートキーパー

１．はじめに

児童養護施設は児童福祉法第 41 条に定められている、児童福祉施設である。対象となる児童は、保護者のない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を必要とする 2 歳から 18 歳までの児童で、特に必要な場合は乳児を含むもので、全国で 589 ヶ所の施設が存在する（平成 24 年 10 月 1 日現在）[1)]。山口県内にも 10 ヶ所存在しているが、その実態について一般的にはまだまだ認知されているとは言い難い。

本学では、平成 19 年度より独自の奨学制度を設けて児童養護施設退所者を数多く受け入れている。学生からは、理解されていないことによる偏見や差別を受けている現状もあると聴く。そこで、本学に在籍している児童養護施設退所者に対しての理解を深めてもらうとともに、若者世代において、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげるといった見守る人の育成を目的とする学生ゲートキーパーの養成を目的とし、児童養護施設の日常を映したドキュメンタリー映画「隣る人」の上映及びパネルディスカッションを行うこととした。

２．上映概要

上映日時：2013 年 9 月 29 日（日）14：45～15：45

場所：山口福祉文化大学 101 教室

来場者：本学学生 61 人，教職員・一般 124 人　計 185 人

内容：映画の内容について、隣る人のホームページ [2)] より抜粋する。

地方のとある児童養護施設。ここでは様々な事情で親と一緒に暮らせない子どもたちが「親代わり」の保育士と生活を共にしている。マリコさんが担当しているのは、生意気ざかりのムツミと甘えん坊のマリナ。親から無条件に与えられるはずの愛情だが、2 人にとっては競って獲得しなければならない大事な栄養素。マリコさんを取り合ってケンカすることもしばしばだ。そんなある日、離れて暮らしていたムツミの母親が、ふたたび子どもと一緒に暮らしたいという思いを抱えて施設にやってくる。壊れた絆を取り戻そうと懸命に生きる人々の、平凡だけど大切な日々の暮らしは今日も続く。

３．パネルディスカッション内容

パネルディスカッションは基本的にコーディネーターと映画を監督された刀川監督を含む 4 人のパネリストによって進められた（プロフィール等は資料参照）。

〔パネリスト〕

刀川和也（「隣る人」監督）

金本秀韓（共楽養育園児童指導員）

山添結理（山口福祉文化大学 4 年）

福田みのり（山口福祉文化大学准教授）

〔コーディネーター〕

梅木幹司（山口福祉文化大学講師）

上映後、まず始めに来場者の方に「あなたにとって隣る人とは？」「映画の感想」等というテーマでカード

*1　山口福祉文化大学　ライフデザイン学部

に一言ずつ記入していただき、それを回収し、コーディネーターから児童養護施設及びそれに伴う本学の取り組みについての説明を行った（3－1）。その後、監督の希望により児童養護施設で生活経験のある山添さんが映画をどのように感じたのかを起点として、自由に討論を行った（3－2~3－5）。討論部分については発言内容をほぼそのまま掲載する。

３－１．児童養護施設の現状

児童養護施設は、児童福祉法第 41 条に規定されている児童福祉施設である。入所対象児童は、保護者のない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を必要とする児童で、特に必要な場合は乳児も含まれる。平成 24 年 10 月 1 日において、児童養護施設は全国に 589 ヶ所存在し、入所者数は 2 万 9,399 人である。

入所者である子どもたちの暮らす施設の形態については、大舎、中舎、小舎がある。大舎とは、定員数が 20 人以上の施設であり、従来の児童養護施設のほとんどがこの形態を占めていた。しかし、現在ではこのような大規模な施設は減少傾向にあり、児童養護施設全体に占める割合は 50.7%となっている。次いでの規模にあたるのが中舎と言われる施設形態であり、定員数が 13ー19 人の施設で、全体の 26.6%を占めている。また、最近増加傾向にあるのが小舎という形態の施設であり、定員数が 12 人以下のものを指す。小舎が児童養護施設全体に占める割合は 40.9%であり、近年では小規模化が進行し、より家庭的な施設形態の中で子どもたちが生活し、社会的自立を目指す取り組みが図られている。その自立を支えるのが、各児童養護施設に配属されている児童指導員や保育士、また、様々な専門性を持つ職員たちである。これらの職員について、在職者数は 1 万 5,575 人である。

また、子どもたちの児童養護施設への入所理由の推移を 1977 年から 2008 年に至るまでの変化でみると、父母の行方不明が 1977 年当時は 28.0%であったが、2008 年では 7%まで減少している。一方、増加の一途をたどっているのが虐待が原因としての入所である。1977 年当時は約 8%だったのに対し、2008 年では 33.1%にまで増加し、その人数は現在、1 万 447 人となっている。

このような入所理由を背景にもつ子どもたちが、児童養護施設で生活するわけであるが、社会的自立を支援する上では、大学等の高等教育機関における教育の保障も重要である。しかし、児童養護施設退所者の大学進学率は決して保障されているとは言えないのが現状である。平成 24 年のデータでは、大学へ進学した者は 169 人で、児童養護施設退所者の 11.0%であった。また専修学校への進学率も同じ数値で、多くは就職であり 70.4%を占めている。一方、全国の高卒者の卒業後の進路は、大学への進学が 57 万 2,000 人で、約 54%である。次いで 23%の者が専修学校に進学する。就職については 16.2%である。これらの結果から児童養護施設退所者が、高等教育機関へ進学することがいかに難しいかということがわかる。そこで本学では、平成 19 年度より児童養護施設退所者の進学を支援することを目的として独自の奨学制度を設け、今年で 7 年目を迎えた（表 1 参照）。現在まで 92 人の児童養護施設等退所者を受け入れ、そのうち 14 人が卒業し、それぞれの職場で活躍している。（本文中の数値については、「社会的養護の現状について」（厚生労働省）平成 25 年 3 月を参照）

表 1：児童養護施設退所者の本学入学者数

入学年度	入学者	卒業生・在籍生
H19	2	2
H20	9	7
H21	11	6
H22	13	10
H23	17	12
H24	23	20
H25	17	17
合計	92	74

３－２．児童養護施設入所者の立場から

刀川：この映画は、去年から映画館で公開をして、それからこういった自主上映会というかたちで上映をしてきています。こういうふうに話す機会は結構ありまして、どんなことを考えて映画を作ってきたのかみたいなことを、基本的には話しています。児童養護施設で暮らしたことがある人たちに見てもらったという経験はあるのですが、児童養護施設で暮らした経験がある人と一緒にこうやって壇上に上がるのは今日が初めてなので、ぜひ山添さんの感想から率直に聞いてみたいというふうに思っています。

山添：映画の感想として、一人ひとりのケースについて話していこうと思います。マイカちゃんという子どもは、担当の方が変わるというケースがあって、このケースは、軸となる人があまりにも一人に固執しすぎたのかなと思いました。他の職員の方ともいい関係ができていたのか、映画の中では分かりませんでしたが、園長の菅原さんは「一対一のシーンを増やしていこう」という方針でした。一人ひとりのニーズや課題に対応できるということはメリットですが、やはり職員が辞められたり、配属先の移動などもあるため担当が変わることは避けられません。そのことは一対一で対応することのリスクにもなり得ると感じました。

次にムッちゃんという子どものことについてですが、実の母親と関わるシーンがあり、菅原さん等も「家に帰してあげたいな」、「宿泊させてあげたいな」という思いがあり、外出や宿泊を実際に支援していました。このケースを観ていただいているので分かりやすいと思いますが、児童養護施設への入所理由が多種多様である子どもにとって、「家に帰り、本当の親と暮らすことが本当にいいのか」という疑問を私は抱きました。家ではなく施設にいるからこそできることはたくさんあるため、今の子どもにとってどういった環境が一番適しているのか、どういう人が関わると良いのかということを考えることが必要と感じました。この映画では小規模の施設であるため、施設の職員さんと子どもは近い人間関係で毎日過ごされています。大舎制であれば、意外と時間で動いているため、先生と深く関わる機会は少ないです。そのため、「ああ、この近さで関わることもいいな、温かいな」と思いました。

映画については、また他のパネリストの方からもお話しいただけると思いますので、私からは、児童養護施設に入所していたということを生かして、お話しさせていただきます。まず、児童養護施設についてよく分からない方、身近に感じることができていない方は、例えば私が施設にいたという話をすると、「あ、この子、親がいないのかな、親に何かあったのかな、虐待を受けているのかな、さみしい思いしているのかな」と思い、遠慮したりすることがあると思います。「施設なんか出たい」「親と一緒に暮らしたい」と思っている子どももいますが、私の場合は母親が病気になり、経済的に厳しい状況になっていたため、施設に入所できたことで生活が安定し、今現在、夢に向かって大学で学ばせてもらっています。今日当たり前にこうやって大学に来ていますが、施設に入所せず、家に居続けていたらどうなっていたのか想像ができません。そのため、施設に入所できて、またよい施設職員に出会えて本当によかったと思っています。

さて、今回のパネルディスカッションのテーマである「私にとって『隣る人』」であってほしいのは、友達です。中学校、高校の頃の友達で、私と関わる前から施設という存在を知っている人はほとんどいません。そのため、「どういうところなの？」とか質問されることがありました。私は「こういうところだよ、こういう人がいて、こういう生活しているよ」ということをフランクに話していましたが、施設にいるということを友達になかなか話すことができない子どももいます。その子どもたちは、施設にいるという現実を負い目に思っています。その原因は、一般社会が児童養護施設を特別視しているからだと思います。私は児童養護施設から社会に出たということを、強く意識したことはないため、かわいそうな目で見られることで、「自分は

特別なんだな」と思ってしまいます。また、児童養護施設だけでなく、高齢者施設や障がい者施設も、意外と身近に感じることはできないと思います。その原因は、施設の雰囲気が閉鎖的で、施設外に向けて情報を発信することが少ないからではないでしょうか。児童養護施設に入所していても、高齢者、障がい者であっても、「みんな人間なんだ」と皆さんに思ってもらいたいです。その方たちに遠慮は不要ですが、配慮することは必要だと思います。私は、遠慮をされると、「私はここにいちゃいけないのかな」、「児童養護施設出身者だから遠慮して、気を遣っているのかな」と思ってしまいます。

本学の児童養護施設出身者の方にメッセージやエールがあります。自分から児童養護施設にいたということを周りの人たちには言いづらいと思います。しかし、現在、児童養護施設で生活している子たちのためにも、「こういうところなんだよ、いろんな個性を持った職員がいて楽しいところなんだよ、制限されることもあるけど一般家庭にいたらできないことがたくさんできるよ」ということを周りの人に、また社会に伝えていってもらいたいです。以前、私と同じく児童養護施設出身者の渡井さゆりさんという方に勉強会でお会いして、施設入所時のことや現在の活動についてお話を聞く機会がありました。渡井さんは児童養護施設出身者が集まることができるコミュニティを東京に作った理事長です。この方のように児童養護施設について話をしたり、実際に出身者のために活動をしたりするような人に私はなりたいです。大勢の前で話をすることは苦手ですが、児童養護施設出身者だからこそ話せることもあり、児童養護施設という存在をより知ってもらうため、頑張って話してみようと思いました。ここにいらっしゃる方だけでも、児童養護施設について理解し、帰っていただけたら幸いです。

３－３．映画製作の意図

梅木：山添さんから児童養護施設のことを知ってほしいというような意見がございましたが、監督、この映画を作るにあたって、そういったこともやはり意図としてあったということでしょうか。

刀川：そうですね。今日、勇気を出して話を山添さんがしてくれているということだと思うのですが、なかなか児童養護施設という場所が、オープンな形でとりあげられることがありません。テレビのニュースだと、いわゆるモザイクが入っていたりとか、誰か特定できないようなかたちでとりあげられることが多いです。僕のこの制作しました『隣る人』では、モザイクは一切使っていません。その代わりさまざまな配慮というのは、映像を編集する中で考えています。今の山添さんのいくつか映画の感想、あとそのほか、児童養護施設で自分が暮らしてきて、伝えたいということを聞いて、何かそれにこたえるかたちで、話をしたいと思います。

この映画を撮り始めて公開をするまでに、2003年末から2011年まで、約8年ぐらいかかってしまいました。最初の頃（2000年前後）は、虐待が社会問題としてニュースでも語られることが出てきて、そういったことから児童養護施設への問題意識をもちました。その8年の中で、最終的に、映画を撮るためにでもありますが、関係を作るためにそこに僕はいなければいけないということで、2年半ぐらい、週の半分を光の子どもの家で、一緒に暮らしの中に入れてもらうというかたちで撮影をしました。そうして撮っていく中で、当初は社会問題とか虐待の問題とか、例えば児童養護施設の現状とか、児童養護施設が抱える問題であるとか、そういったことが念頭にあったのですが、暮らしの中に関わっていく中で、私自身がすごく変わっていきました。それは子どもたちが生活する光の子どもの家は、小舎と言われる小さな単位ですが、担当の保育士さんたちが、一緒に寝食をともにしていると言っても過言ではないような、働き方をされているということです。その暮らしの中に僕も入っていく中で、先ほどかわいそうじゃないというふうに山添さんがおっしゃってい

ましたが、私自身もそういう視点といいますか、高みから見ていたものが、ちょっと視線が下がるという感じですかね。そうすると、どんどん僕自身も関係が近いものになっていった。その中で、児童養護施設のなにがしかというようなことではなく、ちょっと変な言い方かもしれませんが、児童養護施設だけども児童養護施設を撮っているのではないという気持ちになってくるんですね。それは家族、家じゃないのですが、児童養護施設といえば、子どもたちは最後のよりどころというようなかたちでそこに来るわけですけれども、そこで偶然に出会うことになった大人と子ども、子どもたち同士もそうですけれども、その暮らしをとおして、そこには血縁ではないですが、私の言葉で言えば、かけがえのないような関係にもなれるんだなということを感じるようになり、そのことを映画にしてみたいと思うようになりました。それは、とても普遍的な営みです。この映画の冒頭、朝起きてから食事を作り、ご飯を食べて学校へ登校して帰ってきて、帰ってきたら「おかえり」と迎えて。そして、宿題を見てあげたりしながら夕食の準備を一緒にして、一緒にご飯を食べて。小学生以下の子どもであれば一緒にお風呂に入ってあげたりしながら、寝る前には絵本を読んであげて、そのまま一緒に寝ちゃうということが繰り返し出てきますよね。この当たり前のようなこと、当たり前のように見えるのですが、その日常の暮らしの細部というか、最初ご飯を食べているというだけしか見えなかったものが、そこに人と人の関わりにおいてとても重要なものがいっぱい詰まっているんだということを感じるようになるわけです。そのことの積み重ねによって、子どもは生きていけるというか。そんなことを考えるようになっていきました。なので、当たり前のことが当たり前にあるということのすごさというか、その貴重さ。いわゆる世の中のお母さんたちがやっているようなことは、すごいことなんだと。ほめられもせず当たり前のように言われることなのだけれども、毎日の繰り返しのように見える、その一つひとつの子どもとの関わり。人と人の関わり。そのことが、とても大切に思えるようになったんですね。そのことを積み重ねていくことによって、人と人の関係が培われていく。そのことを映画にしたいと思いました。

山添さんの感想にあったマイカちゃんの担当が変わるシーンについては、よく聞かれるシーンです。あれはいいんだろうかというような意見もあるのですけれど、そこの児童養護施設で育ったわけではない僕がそこにいて感じたことは、子どもに対してやりすぎということはないんだろうなということです。どんなにやったって足らない。だから、それはやりすぎじゃないんだと。でも確かに辞めていく人たちもいる。マリコさんが最後、「ずっと一緒にいようね」という言葉も、確かにずっと一緒にいるよと言って辞めていった人たちもいるのはいるし、別れるのがつらいという思いをすることもある。でもその別れを泣けるということは、一方でそういう感情というか情緒が育ってきたという言い方もできるんじゃないか。もう一つ言えば、マキノさんという担当者は配置換えになってしまったということですが、子どもは今でも彼女のことはママと言って、自分のお母さんをお母さんと言ったりとかしているんです。子どもはいろんなふうに使い分けながら、その関係を整理していくんだろうなって、僕は感じてるんですけれども。

マイカのシーンに関しては、そのことが一つ感じたということと、あのマイカが泣き叫ぶ、あのことというのは、もう一つは、子どもたちみんな、人間がというか、誰しもが持っている存在不安というか、自分が安心して安全でいられるというものを失ってしまうかもしれないという、そういう不安みたいなもの。それは共通してあるということを、あのとき僕は感じました。

ムッちゃんに関しては、映画の中では細かくは説明してないので、どういうことがあったのかが語られていないわけですけれども、一緒に暮らしていないがゆえに、幻想が膨らむというか。子どもにとってみれば、

お母さんといればもっとこんないいことがある、あれ買ってこれ買ってと言ったら全部買ってくれそうな。本当にユートピアみたいな生活をイメージする。多分山添さんも児童養護施設にいる中で、今だからこそあそこにいてよかったこともいっぱいあると思ってらっしゃるのかなと思いますが、誰も児童養護施設に「ここいいな」と思って生活している人、僕はいないだろうと。できるものなら特定の誰かに見守っていてほしいとか、一緒にいてほしいというのがあるんだろうなというふうに思うのですけれども。一緒に暮らしていないがゆえに、お母さんという幻想がいっぱい膨らむ。一方でお母さんにしてみても、映画の中では、子どもと暮らしていないがゆえに、子どもと暮らしたらもっといいことがあるんじゃないか。ママとか言ってくれる、かわいらしい子どもと私は一緒に生活できるんじゃないかとか、そういう自分の人生も含めて、そういうものが膨らんでいくというのがあると思うんですよね。でもそれは現実じゃない。で、その思いというのは、子どもも大人も膨らんでいくわけですよね。そのときに今、家族再統合みたいなことで、できるだけ家族に返そうというのがありますけれども、おっしゃるとおり、家に帰ったらしんどいよなということはいっぱいあるわけですよね。でも子どもの、あそこに帰れたらもっといいことがあるという感情、お母さんにしても子どもと一緒に暮らせたら、もっと私の人生が豊かになる、というような感情、その両方がある。これを何か他者が簡単にコントロールしていくということは、やはり難しいということがあって、どこかで大人にとっても子どもにとっても現実を体験して、はじめて分かるというか。例えばムッちゃんは「もう最後だね」と言った。でも、僕にしてみれば、今も関係は続いているんですよ、当然。一緒には暮らしてないですけど、いろんな夢があったけど、夢だったというか、とりあえずここで生きるしかないというか、そういう自分の確認というか、そういうムッちゃんの言葉だったんじゃないかなと思うんですよ。お母さんにしてもかわいいムッちゃんだけじゃなかったんだと思うんです。でも、それでも関係が終わるわけじゃない。一生会わなかったとしても、関係が終わるわけじゃない。だからあの瞬間、職員とか児童相談所の職員は、どうしたらよかったのだろうか、というのは難しいですね。児童相談所は基本的にはできるだけ子どもを親元にということがあるのかもしれませんが、あの場面は、どちらかというとムッちゃんとお母さんの欲求を優先したといいますか、でもその欲求はどこかで現実を体験してしか、その先にはいけないんだろうと。だからとても痛い思いを、当然ムッちゃんも、そしてお母さんも、周りにいた職員さんも、僕もそこにいたら体験するわけですよね。僕のその「隣る人」というさっきのイメージでいくと、その痛みから逃げないでいるというか、まあ一緒にいる人というか。本当に答えがないなあということをいつも思って、あの瞬間に返ったら、あそこでマリコさんも今じゃないんじゃないのということを逡巡したりしますよね。もう起こってしまったことは消せないんだけれども、でもその痛みも一緒にクリアしていかないと先に行けないんじゃないか、と。多分、山添さんも、もっといろいろ聞くと、いろんなことを多分乗り越えてというか、自分の体で落とし込んでこられたと思うのですが、そういうさまざまな境遇、児童養護施設にいる子どもたちの一人ひとりの境遇はさまざまなわけですよね。それを自分がそうやって生まれてきたという境遇そのものを、最終的には受け止め、それを肯定できるようになり、それが自分への信頼へと変わっていけば、もう本当はOKというかね。そんなことを思ったりしました。

３－４．児童養護施設職員として

梅木：いろいろとお話しいただきました。境遇の違った子どもたちが施設にやってきて、そこで職員さんたちと関わっていくわけなんですけれども、実際にそういった児童養護施設で職員さんとして関わっておられます金本さんからも、お話を聞かせていただきたい

んですけれども。

金本：はい。私は県内の周南市に位置します共楽養育園という児童養護施設で児童指導員をしております。この映画の舞台になっておりました埼玉県の児童養護施設、光の子どもの家という施設の形態自体は小舎制という形態を取っておりまして、一般家庭に近い、一軒家のような建物の中で、子どもたちや職員の皆さんが生活をともにしているという構造なのですが、私の勤めている共楽養育園の形態は大舎制という形態を取っています。イメージしていただくとしたら学校のような建物ですね。建物自体が4階建てになっておりますので、その1階から4階までに、子どもたちの生活スペースや、食堂であったり風呂場であったり談話スペース、あるいは子どもたちの個室があるわけです。約50人程度が集団生活をしています。というような状況であれば、当然、映画の中であったような、本当に家庭に近いような生活とはまた違いまして、生活時間に沿うように子どもたちが生活を、ある意味では強いられる部分があります。例えば夕食時間はみんなでそろって食べないといけないとか、入浴の時間が決まっていたりだとか、寝る時間も何時というのが毎日決まっていたりして…。ある意味では子どもたちを自立させるために、そういった児童養護施設が家庭に代わる場所としてあるわけで、子どもたちの自立を支援する存在として児童養護施設の職員はいるわけですが、毎日同じような生活の流れになりますので、子どもたちがなかなか考えて自分たちの生活を作る力というのが身につきにくい側面もあるのかなと。例えば、明日の朝はいつもより早く起きなければいけないから早く寝ないといけないんだけど、寝る時間はいつもどおり10時だから10時に寝ようだとか。そのあとの遅い時間に見たいテレビがあっても、10時までしか見られないから、我慢して寝ないといけないだとか。そういった生活の弾力性というのがなかなか確保できなくて、子どもたちも生活に沿っていればいいやっていうところで、考える力がなかなか身につきにくい子もいるんだと思います。というのが、そういった大舎制という集団生活の中で、子どもたちの生活を支援する立場としては、感じるところは多々あります。

また「隣る人」という言葉を考える意味では、やはり続けるということなのかなというふうには、映画を見ながら感じてはいました。ただ、先ほど山添さんの話にもありましたが、一般家庭で考えると父親と母親という二人が、子どもたちの養育、生活を主に見ていくことになると思うんです。児童養護施設については、施設ごとのやり方で違ってはきますが、個人で担当するやり方が多いというか、そういったふうに子ども一人に対して、一人の担当職員が主に生活を見るというやり方を取る施設もあります。うちもそのような個人の担当制を取ってはいるんですが、その子どもが例えば家に、園に帰ったときに、その担当の職員が毎日いるかというといない日もありまして、当然その一人の職員だけでは子どもの24時間365日見ることはできません。となると、ある意味では、働き続ければそういったかたちで近くで見守ることはできるんですが、毎日子どものそばに居続けられるかというと、決してそうは言えない状況があります。ですから一対一の関係を密に作るということは非常に重要なことですし、子どもたちのそれまで育ってきた生活課題を克服するためにも、信頼できる大人を一人でも作るということは重要なことです。しかし、施設として子どもたちを見守るという上では、当然職員が退職する可能性もありますし、映画の場面でもありましたが、配置換えということで違った生活の場で暮らすことも、時には必要になることもあります。そのため特定の大人と子どもが信頼関係を作ること、プラス、そういった大人を何人か作るような工夫が必要なのかなと。例えば二人、あるいは三人で一人の子どもを担当できるような、グループで担当できるような工夫も必要なのかなというふうに、今、個人で担当している立場としては感じています。そうすれば三人のうち一人が欠けてしまったとしても、残りの二人がいるから大丈夫ということで、

子どもたちの安心感も違ってくると思います。自分がいないときに子どもたちに問題があったら、駆けつけなければいけないようなこととかも出てきますので、職員としても逆にそういったかたちで、自分一人の負担が少ないほうが長く子どもたちを見続けられることができるのかなと。結果としては、2 歳から児童養護施設に来た子の卒園は、高校の卒業が一つの区切りになってたりはするんですけど、2 歳から見ている子が 18 歳になって卒園したと。ずっとその生活の様子を見続けることができたと。そういったかたちで、ある意味では「隣る人」となれる可能性も広がるのかなと、そんなふうに感じております。児童養護施設の職員としてやはり「隣る人」であるということは、働き続けられるかどうかということが、どうしても避けられない課題だと思っておりますので、そのような視点を持って、この映画を拝見させていただきました。

梅木：ありがとうございます。今、最後に働き続けることができるかというようなことも、おっしゃいましたけれども、やはり働き続けること、福祉の現場であって、児童養護施設というのは、かなり子どもたちとのかかわりが密になったりとか、いろいろと大変なことがあるかと思うんですけれども、そういった中で働き続けるモチベーションになっていることはどういうことか教えていただきたいんですけれども。

金本：まずはやはり子どもたちの生活を支援したいという思いが一番強くて、児童養護施設に入職したという経緯がありました。マリコさんという職員の方も言われてましたが、日々の憎たらしいような子どもの表現の中で、ささやかなそういった「ありがとう」という子どもの言葉であったり、こちらがいつも伝えているようなことを理解してくれたんだなというのが、言葉であったり、子どもの行動で実感できた場面などがあれば、自分は親でもないけれども、子どもにとって少しは大切な存在になれているのかなと。影響を与えることができる存在になれているのかなと実感できる場面がありますので、そういった場面が自分の職員として働くモチベーションになっていると言えます。あともう一つ言えることといえば、やはり働きやすい環境ということで、チームワークといいますか、同僚の職員の励ましであったり、サポート体制がしっかりと取られているかどうかというのも、職員として仲間と一緒に協力しながら働き続けられるか、このあたりがポイントになってくるのかなと、そんなふうに感じます。

３－５．相談援助の立場から

梅木：はい。ありがとうございます。そういったことについて、今後も金本さんは県内の児童養護施設を中心として、研究を重ねていかれるということを、われわれもご協力をさせていただきたいなというふうに思っております。最後、福田先生よろしくお願いします。

福田：私自身は今、本学では心理学を教えておりまして、学生からの相談を受けたりというような立場におります。本学に来る前に、私自身は兵庫県の川西市というところで、子どもの人権オンブズパーソン調査相談専門員という職についておりました。そこは基本的には、簡単に申しますと、市内の 18 歳未満の子どものことであれば、どんなことでも相談を受けますよということで、子ども自身、それから親御さん、学校関係者、その他いろいろな方から相談を受けていました。実は子どものことに関して、いろいろな相談機関があるんですけれども、教育は教育の分野で、福祉は福祉の分野でというふうに、行政の中では結構縦割りで、相談も別。どちらかというと、子ども自身が相談に来るというよりは、保護者の方の相談を受けるというような相談窓口が主です。しかし、私が働いていたところでは、子どもの人権って少し言葉は固いですけれども、子どものことで子ども自身以外にも、親御さん、学校の先生も困っているかもしれないけれど、まず、子どものことで困っているのであれば、子ども自身に聞こうよということを非常に大事にした相談機関であ

りました。そういったところで働かせていただいていて、本学に来て、このたびこの映画を見させていただいて、「隣る人」で居続けるということの重要性を改めて感じました。

ただ、相談員という立場は、同じように生活をともにしたり、居続けるということはできない。親として居続けるということでもないし、相談に来たときに相談員として関わるというのは、生活はともにはできないということになるわけです。ただ自分の中で、マリコさんが最後のほうで「どんなムッちゃんでも好きだよ」というふうに言っていたと思うんですけれども、そういうふうな気持ちになれるような関わりというか、それは居続けることの中でも見えてくるかもしれないし、そうではなくてもいろいろ相談の中で、そういった関係性も築けるのかなと考えています。それから私自身の経験として、例えば相談の現場にいると、相談が終わったらもちろん子どもたちとは別れるといいますか、相談に来なくなったら終わりというようなかたちで終わるわけですが、やはり何かあったときに、ちょっと自分のことじゃないんだけれど来たよというふうにして、また相談に来てくれるというようなことがありました。そういったことというのは、何かず一っとその人の生活の圏内に、生活をともにしてるわけではないですけれども、ちょっと言い方は陳腐かもしれませんけれど、心の支えというか、あ、こういうときにこう困って一緒に考えてくれる大人がいたなと、何か自分のことであったり、その友達のことであったり、困ったときにそういえばああいう人がいたなという、そういう距離感ではあるんですけれども、そういったかたちでまた話をしに来てくれる子どもたちの姿を見ながら、少しはそういう子どもたちにとって「隣る人」のような存在になれたのかなというようなことを、ちょっと自分自身のことを思い出しながら、この映画を見させていただきました。

３－６．参加者から

参加者: とても今日は有意義な時間をいただいたと、そのように思います。山添さんにお聞きしたいんですが、とっても貴重なお話をいただいたんですけれど。施設ですね、どうしても社会のほうから施設という見方、そして施設の中にいて社会を見る見方というのがあるんですが、施設から見た社会、こうあってほしいという、もっとこんなふうな社会というか見方をしてもらいたいなということがあれば、教えていただきたいんですけれど。

山添：はい。保育士実習で行かせてもらった児童養護施設について話をさせていただきます。その施設は、非常に地域と密着していました。例えば、施設の行事や地域の行事がある際には、施設とその近隣住民が頻繁に関わっていて、自分がいた施設もこのような環境であれば、より住みやすく感じられたのかなと思いました。施設と地域との連携が、より深くなればいいなと思っています。

梅木：子どもを支える地域の連携が大切だということですね。先ほどの上映のあと、感想としてカードに書いていただいたものがありますので、それを数枚ご紹介させてください。まず、60 代の女性の方ですけれども、感想として「重く感じました」。その他、「肉親だけではうまくいかない関係がいろいろあります。そのとき「隣る人」の存在が大きく関係してきます。その存在の大きさを改めて思いました。私が誰かの「隣る人」になる努力をしていきたいと思っています」、「子どもの心、まなざし、考えていることと、思いと違う言葉が出てしまうんだろう。ムッちゃんの声を聞き、私はもっと人とより添える力を持たなければと思いました。「隣る人」を自然体でできればと思います」あと「私にとって「隣る人」は今を一緒に過ごす人々のことです」というようなご意見です。まだまだたくさんのご意見をいただいておりますけれども、数枚ご紹介させていただきました。

３－７．まとめ

刀川：ありがとうございました。今日とってもうれしかったのは、山添さんが横にいてくれるということです。率直に意見を述べていただき、うれしかったです。僕は外側にいる立場ですが、でも児童養護施設のことを、外側に開いて、自分たちだって人間なんだよという、そんなとこまで思うのかというふうに改めて思いました。モザイクの話でちょっとだけ話させてもらうと、光の子どもの家は僕が映画を撮る前にテレビでもいろいろ撮影されたりしているのですが、最初の頃は、みんなプライバシーのことがあるから、光の子どもの家もわからない、顔だって何もわからない、もう本当にモザイクだらけで、音声は変えてみたいなことでやっていたんですって。そのときにそこで映っていた中学生が、菅原さんという光の子どもの家の今の理事長のところにやってきて、「あれ、何」と。「私、犯罪者？」というふうに逆に聞かれたと言って。子どもたちを守っているつもりが、逆に子どもたちを自分は差別しているんじゃないかということを気づかされたんだと、菅原さんは言っていたんですね。結局プライバシーも、実は社会というか、そういう目が逆に差別だと思わせているということを、改めて気づかせてもらいました。本当に今日はうれしかったです。ありがとうございました。

山添：児童養護施設がもっと地域社会に根づいて、地域社会の一部として溶け込んでいってほしいという思いと、私もこれから児童養護施設で生活したことを誰かに伝えていかなければならないなという思いです。また、本学の児童養護施設出身の後輩たちにもぜひ、児童養護施設について様々な人たちに話していただければいいなと思います。最後に、生意気ですが、監督にはもっともっと全国を回っていただいて、この映画を通して児童養護施設について、また「隣る人」について皆さんに伝えていってもらい、全国の皆さんがこのことについて考える機会を提供していただきたいと思っております。ありがとうございました。

金本：先ほど私の話の中で、職員が退職をしてしまいまして、子どもと関係が離れてしまうという話をしましたが、逆のケースもありまして、施設で生活していた子どもたちが家庭に帰れるようになって、職員から離れるようになったケースであったり、あるいは高校を卒業して、仕事が決まって、自立する生活が決まったから、施設を出られるようになった、そういったケースで、子どものほうからいい意味で児童養護施設の職員から離れるということがあります。そういった施設を卒園した子どもたちが、時々、今でも私やそのほかの職員を訪ねて、施設に遊びにくるということもあります。卒園してからも、一緒に生活はできないけれど頼ってくれる、あるいは様子を見にきてくれて近況を話してくれる。卒園した子どもたちにとって、そういった職員であり、人でいられるように、今の児童養護施設での子どもたちとの生活を、より一層深めていければなと、そんなふうに感じました。

福田：この映画で描かれていることが何か特別なものではなく、皆さん一人ひとりが自分も「隣る人」になれるのかなというふうに考えてもらえるきっかけになったのであればうれしいなというふうに、企画した者としては思いました。

梅木：皆さん、ありがとうございました。今日のお話は子どもの話が中心でしたけれども、われわれもみんな子どもの頃があったわけです。その子どもの心というのは、大人になるにしたがって忘れるというのがありますね。そして、われわれ大人は子どもに対して養護するとか援助するとか、守るとか支えるとか、支援する、そういった言葉をよく使いますが、本当に子どもにとって必要なことというのは、また子どもの立場として必要としてるものというのは、優しく寄り添ってくれる人であって、それがたとえ遠くにいる存在であっても、心に寄り添ってくれる人が「隣る人」であるということなのかもしれません。

そういった、現代社会では孤立が高齢者だけの問題ではなく、各世代においても、また地域でも存在して

います。自殺者も年間約3万人という、非常に悲しい状況において、自殺実態解析プロジェクト NPO 法人ライフリンクというところがあるのですが、そこでは「自殺は人の命に関わる極めて個人的な問題である。しかし自殺は社会的な問題であり、社会構造的な問題でもある」というふうに指摘しております。本日の上映については、山口県の「若者世代に対する心の健康づくり支援事業」の協力をいただいております。この事業はゲートキーパー、いわゆる悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、そのような見守る人の育成などを目的としているものです。人に言えない、どこに相談したらよいのかわからない、どのように解決したらよいのかわからないといった悩みを抱えた人を支援するため、さまざまな人たちがゲートキーパーとしての役割を果たすことが期待されております。大きなおせっかいは必要ありませんが、ほんの小さなおせっかいが地域がともに助け合うという、新しい仕組み作りへと発展していけば、われわれの生活がもっと豊かになるのではないかと思います。「隣る人」になるのは本当に難しいことかもしれません。存在としてすぐに寄り添えなくても、いつもそばにいるという、心に寄り添う「隣る人」は、誰もがなれることができるのではないでしょうか。

４．参加者アンケート結果

上映・パネルディスカッション終了後、アンケートを行った。計132人からの回答を得た。図1は上映会に対する満足度を示している。

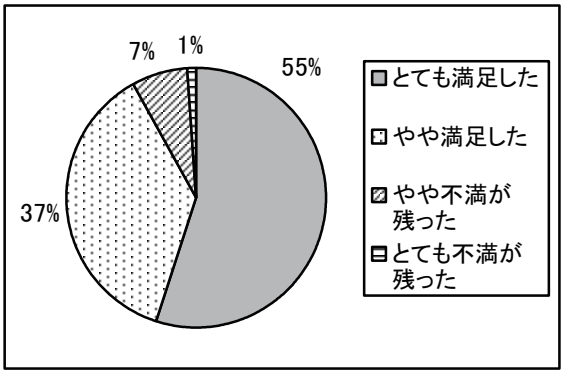


図1：上映会に対する満足度

アンケートより、上映会に関して自由に記述してもらった部分を一部抜粋して以下に紹介する。

・子どもの意志に最大限寄り添う姿勢をつらぬく、ぶれない理事長の姿と、一方、プロとしての客観性と割りきれない割りきれなさの中でゆれる職員を見ていて頭が下がりました。すごい人たちとすごい力をもった子どもたちに光を当ててくれた刀川さんに感謝します。子どもたちは生活、職員は仕事でも隣る人。私に出来ることは隣る人を支える隣る人になることでしょうか。（50代男性・山口県）

・まず、「隣る人」ということばはなんて意味深く、この3文字でいろんなことを表現していると、素晴らしいと思いました。内容については、なるほどそうなのかと今まで知り得なかった世界のことを長い人生の中で少しでも知り得たこと生きている間、ゲートキーパーの心得を少しでも役立てたいと思います。（70 代女性・山口県）

・児童養護施設で生活している子どもの様子、それを支える先生の様子がよく描かれ、それを見る機会を与えていただいたことに感謝します。「隣る人」になれるかどうかしっかり考えさせられました。そして、なりたいと思いました。しかし、難しい内容でした。共に感じて何ができるか、まずは出来ることから始めたいと思います。（60代女性・萩市）

・いろいろな理由で、本来あるべき家族の形態をとれないなら、だれかがそばにいるだけでいいと思わされました。（40代女性・山口県）

・親ではないのに、親にかわって家庭と愛情をこんなにも与えようとされている職員の方々に頭が下がるばかりです。また、子どもはこんなにも愛されたがっていることを改めて思い出しました。（40代女性・萩市）

・親のありがたみが分かった。（10代女性・萩市）

・長い年月の間、親子関係、施設の人達との関係がどのように変化し、そして変わらないのかよく見えました。誕生会のまり子さんの涙に共感しました。（40 代女性・萩市）

・何らかの事情で家族間の愛情に恵まれない子どもたち。それを支える人々によって、いつしか笑いをとりもどしていくのが印象的。（70 代男性・萩市）

・何故女性は母親となれるのか、いや固定感をもたず人とのかかわりと指導員の方の思いが強すぎる気も感じました。頑張っておられるのにごめんね。（60 代女性・萩市）

・施設の実体？というものが日常みえてこないというかこれといった関心を正直もったことがなかったのですが、映像を通してそこで生活する人、それを支える（となる人）人、家族の関係の複雑さがみえて見終った後、複雑な気持ちが残ってしまったが、山添さんの話を聞いて、彼の配慮は必要、遠慮は無用の一言が印象に残った。可哀想という上目線は必要ないと思った。（40 代女性・萩市）

・何らかの家庭事情があって両親と暮らせない子どもたちを心から支えている「隣る人」という存在についてははじめて知りました。我が子のように接している日々の彼女らの心に深く感動しました。子どもの側に居続ける人の重要な意味を実感しました。（50 代女性・萩市）

・まりこさんたちのような隣る人に出会えた子どもたち、よかったなと思います。養護施設の一面について、この映画を通して見ることができてよかったです。子どもと関わる仕事をしています。「隣る人」に近づけるように努力していきたいと思います。（30 代女性・山口県）

・現代では肉親だけでは難しい人間関係を他人であるが故に一歩退いて対応できる人の存在を実感できました。（60 代女性・萩市）

・この映画を見て自分が施設で生活していた時のことを思い出しました。今回は客観的に施設での子どもの生活風景を見て、本当に子どもは素直で常に甘えを見せている。そういった子どもに対して先生方も臨機応変に対応していかなければならない。ただ子どもが好きなだけでは務まらないと思った。（20 代女性・萩市）

・皆それぞれ違う人生を歩んで、真っすぐに生き抜く強さの裏には必ずその人を支えてくれている人がいる。その人の存在に気づいている人や気づいてない人の差はあるかも知れないが、映画を見て頑張ろうと思った。（20 代女性・萩市）

５．おわりに

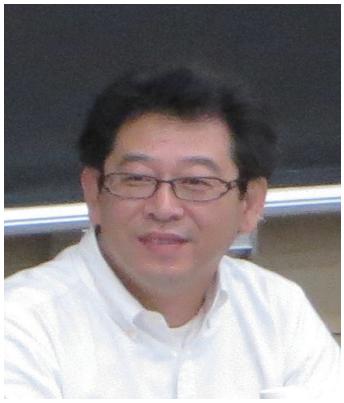
上映会及びパネルディスカッションに参加した人のアンケート結果より、参加者それぞれが「隣る人」について考え、満足している様子がうかがえた。今後も本学の様々な取り組みを知ってもらい、地域に貢献できるような事業を企画していく必要性を感じた。

[引用・参考文献]

1) 厚生労働省；社会的養護の現状について（参考資料），2013，http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/ dl/yougo_genjou_01.pdf（2013.11.8）

2) 隣る人；http://www.tonaru-hito.com/sakuhin.html（2013.11.8）

パネリスト・コーディネーター紹介



刀川和也（たちかわかずや）

1966 年生まれ。熊本出身。2001 年よりアジアプレス・インターナショナル所属。フリーの映像ジャーナリストとして、2001 年から 2002 年にかけて、アフガニスタン空爆の被害を取材、テレビ等で発表。その後は主に、国内及び東南アジアでカメラマン、取材ディレクターとしてテレビドキュメンタリー制作に携わる。述べ 8 年に渡る撮影を経て、『隣る人』を完成させた。本作が初監督作品。『隣る人』は、第 9 回文化庁映画賞・文化記録映画部門大賞、第 37 回日本カトリック映画賞を受賞。

金本秀韓（かねもとしゅうかん）

共楽養育園児童指導員

山口県出身。山口県立大学社会福祉学部卒業。大学卒業後、周南市にある児童養護施設、共楽養育園に児童指導員として入職。現在、山口県子どもソーシャルワーク研究会の会長として、幅広いネットワーク作りを展開し、山口県内の児童養護施設における子どもへのより良い支援体制の確立を目指し活躍中。

福田みのり（ふくだみのり）

山口福祉文化大学ライフデザイン学部准教授

山口市出身。専門は教育心理学、発達心理学。臨床心理士、社会福祉士。川西市子どもの人権オンブズパーソン調査相談専門員を経て現職。前職では公的な第三者機関として、保護者、学校関係者、子ども自身などから子どもをめぐる様々な相談を受ける。その中で大切にしてきたことは、「子どものことは子どもに聴く」という姿勢。相手を尊重しながら、自分はどのように「隣る人」になれるのか？教員としても相談員としても模索中。

山添結理（やまぞえゆうり）
山口福祉文化大学ライフデザイン学部4年（子ども生活学領域）
北九州市出身。保育士資格及び社会福祉士受験資格取得見込み。同市の児童養護施設で小学6年から高校3年までの7年間を過ごす。児童養護施設では苦しい思いをしたものの、職員の支えがあったことで今では「児童養護施設にいたからできたことはたくさんある」と思えるように。こうした経験を活かし、将来は福祉関係の仕事に就くことを希望している。

梅木幹司（うめきもとし）
山口福祉文化大学ライフデザンイン学部講師
京都市出身。介護付有料老人ホーム生活相談員、聾亜児施設児童指導員、専門学校教員を経て現在に至る。専門学校時代から社会福祉士養成に携わり、山口福祉文化大学おいても福祉の現場で活躍できる社会福祉士を輩出すべく奮闘中である 。